昭和51年5月9日第三種郵便物認可　平成14年11月1日発行（毎月一回1日発行）

ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.372

2002 NOVEMBER

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

2003年ＨＡＪサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027ｍ)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1．期間：2003年７月18日(金)～８月25日(月)
2．募集人員：10名程度
3．負担金：75万円
4．資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5．申込〆切：11月30日（定員になり次第〆切）
6．その他：ＨＡＪの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しない。

チベット カンペンチン(7,281ｍ)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰（北峰）を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1．期間：2003年７月20日～８月25日（37日間）
2．募集人員：10名程度
3．負担金：85万円
4．資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5．〆切り：定員になり次第
6．その他：ＨＡＪの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

チベット高原の夏は花々の天国だ。ニンチン・カンサ西稜のＢＣは4,800ｍ。北向きの崖に薄く小さなブルー・ポピーが風にそよぎ、草原に羊とヤクが草を喰んでいる。その向こうに白く大きなニンチン・カンサの西稜が輝いていた。

2002.8.14　ＢＣにて（文・写真：山森欣一）

ヒマラヤ No.372

1．ニンチン・カンサ(7,206ｍ)登山報告
16．新連載 ロー・マンタンの空、遥かなり(6)　高橋　照
21．ＨＡＪ隊ＧＩ(8,068ｍ)登頂と救助速報　野沢井　歩
22．ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・ヒマラヤから〉
24．寸感・事務局日誌

ニンチン・カンサ（7,206ｍ）登山報告

■ はじめに

ニンチン・カンサはラサからジープで４時間、近くて立派な山姿をもった山である。私は、1996年夏にこの山の西面を観察して、ＨＡＪサマー・キャンプの舞台と決めた。

97年の天城隊は、栃木隊が開いたルートを登ったが、1998年の関根隊はさらに奥に入り込んで、西稜に新しいルート（ＨＡＪルート）を開いた。そして2001年の酒井隊も西稜の第２登に成功した。

さて、今年の隊は、応募者が少なく登山隊の派遣について迷ったが、本会の創立35周年、国際山岳年と記念の年でもあることから、私が参加して実施することに決めた。ところが最年少隊員が勤務の都合で参加を取り消すという事態になった。私は登攀活動に参加しないので、残ったのは高齢者の３名である。これでは登頂はおぼつかない。せめて頂上に肉薄しギリギリ登頂の機会を掴むために、４月に入り中国側に高所協力員（ＨＡＰ）２名の派遣を依頼した。ＨＡＪとしては中国登山始まって以来のＨＡＰの雇用である。

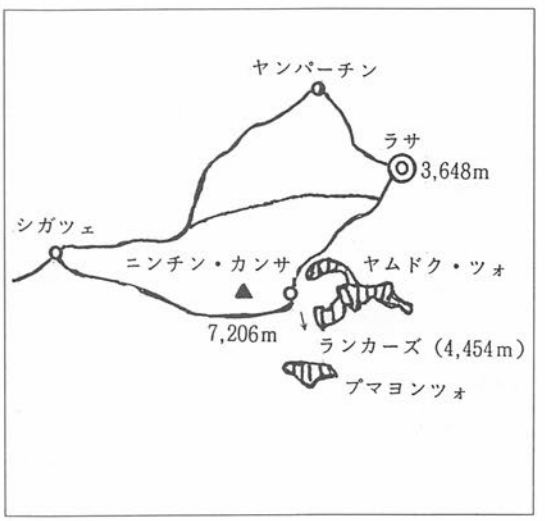
高齢者が多ければ高山病対策が肝要である。過去の隊も何人もラサへ引き返している。その対策として、今回はＢＣ手前のランカーズで３日間の高所順応期間を設けた。つまり、標高3,648ｍのラサで一回4,200ｍ程度の高所を経験した後、4,454ｍのランカーズで３日間滞在し5,000ｍ程度までの高所順応を行い、4,800ｍのＢＣへ入ろう、という計画であった。これは、隊員にとっては相当の効果があったと思われる。体調が一番悪かったのは私であった。私は、日本を出発する１週間程前に咳と痰が出ており薬を飲んでいたが、ランカーズで両手足の指がチアノーゼ症状を呈し、ＳＰＯ２も45前後であった。折しも出発する直前に機関誌「ヒマラヤ」にＰ.ハケットらの「高山病」の研究報告が載り、それによれば、この症状は肺水腫になる可能性が高い。ちょっと悩んだがＢＣ行きを決断したが、ＢＣ入りしても体調は今一であり、付き合い酒も止めたほどであった。

夏のニンチン・カンサは、雷が頻繁に襲来することが過去の３隊から報告されていたが、噂に違わず強烈な雷鳴に見舞われた。しかし、やはり高原は夏に限る。小さくも美しい何種類もの花々が草原を採り、ブルー・ポピーが風に揺れていた。

登頂は出来なかったものの、隊員はそれぞれ得るものが多かった登山であったようだ。何にも増してＨＡＪ35周年を無事故で迎えることが出来てホッとしている。　　（記：山森欣一）

記

１．登山期間：2002年７月20日～８月25日
２．登山ルート：西稜
３．隊員名簿（年齢は登山終了時）
　隊長：山森欣一(1944.2.　生)　58歳　東京
　副隊長：樋上嘉秀(1944.6.　生)　58歳　大阪
　隊員：柳謙一（1941.8. 生）　61歳　福岡
　隊員：大神田伊曽美(1944.5.)　58歳　東京
４．結果：８月17日、Ｃ３（6,400ｍ）から樋上副隊長、大神田隊員、ＨＡＰ（アワン）が午前４時に頂上アタックに向かったが午前11時40分、標高約6,700ｍで時間切れのためアタックを中止した。



■ベース・キャンプを目指して

7月20日（土）山森・大神田　　成田－北京
　　樋上・柳　　関空－北京

東京組の山森隊長、大神田は人で大混乱の成田に早目に集合したが、すでに長い行列が出来ており、荷物を預けるのに時間がかかった。突然山森隊長が「大神田、大至急カウンターに来てくれ」と大声で叫んだ。何事かと走って行くと、なんと、ビジネスクラスに乗れると言う、おかげで美味しいワインが飲め（隊長は……）ゆったりと空の旅を楽しめた、リエゾンの李さんの出迎えを受け、関空組も無事到着し、全員が北京に集合した。夕食は中国登山協会の方々の心のこもった歓迎を受ける。

7月21日（日）　北京－成都

本日は移動のみ、成都は一日だけなので、必要な物だけ小ザックに入れ、北京を出発、成都空港で四川探検旅游公司スタッフの出迎を受け、夕食は皆さんと口が曲りそうな辛い四川省料理を食べに行く。

7月22日（月）　成都－ラサ

クンガ空港から車でラサ市内に向かう、昨夜の大雨で途中の小さな村は大洪水、道路に水が溢れ、その中を水しぶきをあげて車でつっ走る。チベット登山協会の近くの郵電賓館に落着く。隊長から高所協力員（ＨＡＰ）が３人になったと報告があり、真黒に日焼した３人の若者を紹介される。

7月23日（火）　ラサ

午前中、メンバー、リエゾン、ＨＡＰ全員で空ザックを背負って近くのバザールに食料の買出しに行く。すごい人混みと大声の中、大神田が品物を選び、リエゾンが交渉し、隊長が代金を払う、それにしても野菜の豊富さにはおどろく。クタ、クタになってホテルに帰る。午後は登山協会の倉庫で食糧と、装備の点検、梱包作業だ、ＨＡＰも協力してくれたので５時には終了した、慌ただしい一日だったが、これも遠征の一つの楽しみでもあると、思った。

7月24日（水）　ラサ

樋上、柳、大神田は4,300ｍまで順応登山。ラサの町を見おろしながら、のんびりと登るが雨上りの上部の岩場は、つるつると滑べる。下山はルートなきガレ場を滑べり下りる。夕食はチベット登山協会の方々の歓迎を受け隊長の友人往年の名登山家達に会え、感激!!

8月25日（木）　ラサ－ランカーズ

青く輝やくヤムドクツォ湖につい車から身を乗り出してしまう、途中から大雨になり、落石を気にしながら4,454ｍのランカーズへ昼食抜きで着く。ランカーズは、山々にかこまれた大草原で、みどりの麦の穂と、黄色に輝くなの花、あぜ道にはかわいい花々が風にゆれ、村人はのんびりと歩いているとてものどかな村だ。

7月26日（金）　ランカーズ

雨がやみ、みどりの山々の裏に白い峰々が見えて来た。昨年の隊では、あまり評判の良くなかったランカーズのホテル、電気はつくし（私の部屋はダメ）フトンは新しい、部屋も奇麗だ、何んと言っても食事が美味しい。午後から大神田は、近くの岩山に順応に出かける。リエゾン、ＨＡＰはマヨン村まで偵察に出かけたが、途中の道路が破壊され、通れないと言う。アプローチのルート変

▲ベース・キャンプとトランプに興じる中国側スタッフ

更が隊長からある。

7月27日（土）　ランカーズ

早朝にＨＡＰ３人は、隊荷と共にＢＣに向う、樋上、柳、大神田は近くの山に順応に出かける。暖かな登りをゆっくりと歩るく。ランカーズの村と、キラキラと輝く湖が美しい。一番高そうな所へ行くが、4998ｍで、5000ｍにはとどかない。樋上リーダーとガンバレ!!ガンバレ!!と高度計を励ますがピターと止まって動かない。下山は小雨の中、ズルズル滑べる草付きをトラバースし、ガレ場を今日も滑べりおりる。ヨーシ!!　明日こそ5000ｍを越えるゾと心の中で決意する。

7月28日（月）　ランカーズ

めずらしくスカッとした朝だ、車で送ってもらい、樋上、柳、大神田は5000ｍを目指し順応に出かける、草付きを過ぎると、今にもガラガラと岩が落ちて来そうなおっ立ったガレ場だ。最初の大ピークまで延々とガレ場を登り一気に300ｍをかせいだ。第２ピークでやっと5000ｍを越えた。途中で大粒のみぞれが雪に変り岩稜をずり登って第３ピークに立つ高度計は5300ｍを指している。それにしてもすごい岩山だ。大ピーク４つと、小ピーク３つを越えて岩場のトラバースとガレ場をいやというほどすべり降りて車の待つ道路に着いた。満足の一日だった。

7月29日（月）　ランカーズ－ＢＣ

９時、車でＢＣ目指してランカーズを出発。天気は悪くない。途中から車を降りて馬に乗り変えるのだが、これが恐しい。ゴーゴーと流れる川を馬に付けた荷車に乗って渡るのだが、今にも振り落とされそうだ、思わず目をつむって、オムマニペメフムと祈る。デコボコ道を自分勝手に走る馬にハラハラさせられながら、やっとマヨン村に着く。そこからは、みどりの草原をのんびりと歩きながらＢＣに到着。暖かいティーに迎えられホッとする。装備の点検、トイレ作り、少し早い夕食とＢＣ開きは、ビールも入って中国スタッフとの交流も深まった。早速、テントをたたく大粒の雨とカミナリの歓迎を受けた。いよいよ、明後日から登山活動開始だ!!　　（記：大神田伊曽美）

■登攀記録（７／30～８／20）

７月30日　朝方の曇り空から夕方まで好天に。

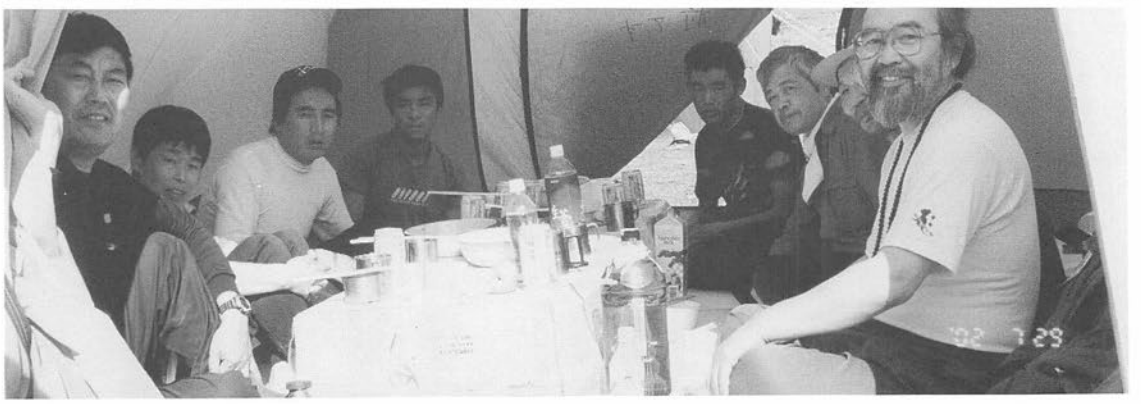
今日はＢＣ入り翌日なので、取り敢えずは休養日となり、隊荷の整理などで一日を過ごす。

９時前に起床後、朝・昼を兼ねた食事前に天気の良いのを見越して川で洗濯と洗髪をする。

食後はハイポーター（ＨＡＰ）３人を手伝わせてのスノーバーシュリンゲを結わいたり竹竿に赤布を付ける作業。その合間合間に彼らにユマールなどの登攀具の使い方、スノーバーの打ち込み方やフィックスロープの結び方を指導。リーダー格のアワンは有る程度知っている様だが、アルーとプブーは些か心許ない感じ。

この後は上部キャンプ用食糧の配分と小分け作業。ＣⅠ用には五日分＋予備食一日分、ＣⅡ用には二日分と予備食一日分を用意する。

16時に作業が終了し、缶ビールを一本頂戴。シャツ一枚でも暑くて堪らぬ程で、半日で洗濯物が乾き、早くも日焼けする好天下での作業後だけに喉



▲ＢＣ開き。左から李連絡官、大神田、アルー、ププ、アワン、柳、樋上、山森

▼氷河湖（デポ地）に残されたＨＡＪの文字

には何とも心地よく、夜来の腹痛も退散だ。

ところが17時を過ぎて夕食を摂り始めたら途中から天気が急変して霰が降り出し、時間と共に激しさを増すと同時に事前の情報通りの物凄い雷鳴が轟き出して、好天に浮かれていた心に今後の天気の不安定に対する緊張の糸が張る。19時半になってシュラフに潜り込むが、その後も霰と雷は長時間続いて中々寝つかれぬ夜となった。

７月31日　天気は昨日と同じ様な展開となる。

この日からいよいよ登山活動開始。初日の隊員は先ず過去２年間のＨＡＪ隊がＡＢＣ或いはＲＣとした氷河湖畔の5200ｍ地点（以降、デポ地点と称す）までへの高所順応と足慣らしを兼ねた偵察登行。同行のＨＡＰには早速ながら荷揚げ活動に入って貰う。

７時に起床。ここＢＣではこの頃から夜明けを迎えるが、昨夜の悪天が尾を引いた曇り空で寒々とした感じがする。７時半の朝食後、ＨＡＰに今日の行動予定と荷揚げ物資を説明。今日はアルーがコックとしてＢＣに残り、アワンとプブーが荷揚げ当番なので、２人には約20キロづつの隊荷をデポ地点まで荷揚げして貰うとする。

隊長らの見送りを受け、８時半にＢＣを隊員３名、ＨＡＰ２名の全員で出発。流れを右岸に渡渉して左手に右岸尾根山腹に続くガレの急斜面を見ながら草地のなだらかな窪地を右上する。何でも無い斜面なのにペースが上がらず、殆ど空身と言うのにＨＡＰ２人のスピードには太刀打ち出来ない。左に折れ返して右岸尾根を越え、今度はガレの斜面を左から巻いてコブに登り出ると、丁度10時の交信時間となり、ここからだとＢＣとの無線がよく入る。このコブから左に僅かに下った地点の小さな池を通り過ぎて隣の谷に入り、更に後少し下ってから右に折れ返して登り返す事僅かでコル状の高みに出る。正面下は窪地になっていて、その窪地の右サイドには見覚えの有る氷河湖が有り、そこから奥へは延び上がる斜面が続いて正面遠く上部に延びる氷河が広がり、その舌端から下の幅広い黒壁を落ちる数条の糸を引いた様な滝と下流に末広がりに続く雪面が見られる。間違いなく過去の報告書の写真と同じ光景で、そばの斜面に小石を並べて書いた「ＨＡＪ」の文字が残っているところからも目的のデポ地点だ。10時半とＢＣから２時間での到着は初回にしては先々。早速ＨＡＰの２人に荷物をデポさせ、上にブルーシートを被せる。

ＨＡＰの２人は11時過ぎにＢＣへ下り、我々隊

▲ＢＣからＣ１へ向かう。左から柳、植上、大神田、アルー、ププー。

員は滝下5250ｍの雪面そばまで足を延ばしてみる。デポ地点からも見えていた様に過去２年間の報告書の写真には見られなかった雪面には雪崩の跡のデブリが有り、今年の天候の悪さが見て取れた。周囲を一応観察し終え、11時45分に下山を始め、12時50分ＢＣ帰着。柳隊員は少し遅れて帰る。14時からの昼食を終えてからは夕食までフリータイム。夕方近くから一時雨が降って風が吹き付けるが大した事なく過ぎ去る。18時に始まった夕食ではウィスキーの湯割りを三杯。後は暫くの談笑で一時を過ごし、日の暮れかけた19時に就寝。

８月１日　朝方から雨と、一日中悪天。

今日は再度、デポ地点まで登った後、Ｃ１へのルートを偵察するのが任務。

７時に起床し、７時半から朝食。アルーとプブーの２人が一足先にデポ地点への荷揚げに出発。８時45分、大神田隊員と私は登山靴や登攀具を持って15分遅れで彼らの後を追う。柳隊員はランカーズから突発的に起こる鼻血の事も有り、今日はＢＣで休養。

小雨の降る中を登って行く内に雨は止んで回復基調が見え出す。ところが11時過ぎにデポ地点に着いて天気の推移を暫く観察していたが、次第に上部が雲に覆われ悪化する気配。視界が殆ど利かない状態では偵察も出来ないので、上部へ向かうのは中止とし、12時前にＢＣへ下る事にする。ＨＡＰの２人は、先に荷物をデポして下山。その２人が下りの途中で２度目の荷揚げに登って来るのと出合う。流石に馬力が有って羨ましい。

12時半に帰り着いたＢＣも雨である。14時からの食事の後はフリータイムとなるが、その頃から天気が良くなり、行動が思うに任せないのが苛立たしい。柳隊員は15時半から夕食時まで近くの高みの散策に出掛ける。

18時過ぎからの夕食では明日が休養日なのでウィスキーを少し多めに飲む。しかし飲んでいるのが私一人では酔い気分も余り盛り上がらない。日暮と共に又も雨が降り出し、時間と共に激しさを増す。シュラフに入っても天気の不安定さに今後のタクティクスが思い遣られる夜だった。

８月２日　曇りから晴れ、夕方から雷雨と天気の変化は目まぐるしい。

▼デポ地（氷河湖）から氷河を望む

アワンとプブーのＨＡＰ２人は朝一番でデポ地点までの荷揚げに出掛けたが、我々隊員は休養日なので９時の起床。夜来の雨は止んだものの少し肌寒く、周囲の高みは冠雪して真っ白。程なくマヨン村から２人の子供がやって来てテント周りを賑わせる。11時からの食事を終え、天気も良くなったので退屈凌ぎに右岸尾根へ一人で散策に出掛ける。小１時間で登り着いた小ピークで荷揚げを終えて下って来たアワンとプブーに会う。彼らも気分転換の為か、わざわざ遠回りして帰って来た様だ。その後、更に本流上流方向に足を延ばしてみると、流れ奥には幾つかの集落が有るのが見受けられ、訪ねて見たい気持ちを起こすが、雨の降り出す気配に急いでＢＣに戻り、往復２時間の散策を終える。

隊長と缶ビールを一本飲んでいる内に17時の夕食を迎える。ところが食事中から連日お決まりの雨が雷鳴を伴って激しく降り出し、やがては霰となって降り続く。これではゆっくりする気にもなれず、19時には自テントに戻るが、雨と雷の音にこの夜も中々寝つけなかった。

８月３日　曇りから雪になったり晴れ間がでたりと天気の変化は激しい。

何時もと同じく７時に起床し、７時半からの朝食を済ます。今日はＣＩ予定地まで登る計画なので登攀具にフィックスザイルなどを持ち、８時半にＢＣを出発する。デポ地点には11時半に到着。ところが柳隊員が体調不良でＢＣに引き返す事になり、デポ地点の荷物を上部への荷揚げ優先順に仕分けして貰う作業を頼んでＣＩへは大神田隊員

と私の二人で向かう事にする。

11時にデポ地点を出発。一旦、氷河湖の左手まで下り、そこから滝下目指してガレを緩く登る。滝下の氷河湖との距離の半分辺りまで広がる雪面の末端まで来ると滝の左手の岩場に３本の赤布を付けたポールが上部へ並んでいるのが見られる。ランカーズで出会った時、敗退して下山して来たと言っていた北京の清華大学隊の立てたものらしく、確かに氷河を離れて左に登らねばならないＣＩへ向かうには最短コースだし、岩場としての難度も高くはない。しかし荷物を担いでのルートとしては危険が有りそうなので過去のＨＡＪ隊と同じルートを選ぶ。

雪面の末端に沿って右上し、左岸のガレ斜面と雪面の境目を滝場の下まで登った後、今度は岩壁の右端に沿って滝の高さまでガレを攀じる。次に左に折れ返して岩の切れ目を滝の落口に繋がる岩棚の上へと登り出る。ここで大神田隊員が一苦労し、フィックスが有れば楽かもとも思うが張っている時間的な余裕がない。

途中に雪面（後半は融けて大半が消滅）の出て来る岩棚を幾らか登り加減で右岸に渡り、岩稜下に続く急斜面をガレ場を攀じて行く。しかし蟻地獄の様なガレでよく滑るし落石を起こすしで危険過ぎる場所だった。このガレ場の上は幾らか平坦な雪面で、右手には西稜からの氷河が大きく広がっている。ここから左に向かい、左上に岩峰を仰ぎ見ながら、その右手の急峻な雪面を登り切った所がＣＩ予定地前の岩稜上のコル。このコルを目指して喘登するが、途中から雪が激しく降り出して視界が効かなくなる場面も。しかし程なくして収まったと思ったら、今度は日射しが激しく照り付けて暑くて堪らない。途中の清華大学隊の残した大岩に固定してあるフィックスロープ２本に助けられたりしながら最後に頭上の岩壁に挟まれた狭いガリー状の急斜面を攀じ切り、ヘトヘト状態で漸くコルへと登り着く。ここから右へ西稜を登った所が僅かに平坦な5800ｍのＣＩ予定地。反対側が切れ落ちたナイフリッジ状の場所で思ったよりも尾根幅は細いし幕場も狭いが贅沢を言えば切りがない。下山するまでに二度見た雪崩は幕地には影響なさそう。

時間は既に18時になり、ここに途中にも何本か立てて来た目印の赤旗を立てて急いで下山する。デポ地点に戻って見るとＢＣに下ったと思っていた柳隊員が待っていて、何でも滝上の5400ｍ地点まで登ったそうだ。

21時に３人揃ってＢＣ帰着。30分後に始まった食事中に又も雷雨となり、この日の天気は目まぐるしい。明日は休養日なのでアルコールを少し多めに飲み、23時に就寝。

８月４日　晴れ間の少ない曇り空の一日。

隊員には休養日だが、ＨＡＰが荷揚げにＣＩへ向かうので７時に起き、アワンとアルーが８時に出発するのを大神田隊員と２人で見送る。

休養日お決まりのブランチを11時に摂った後、風が幾分強く肌寒さを感じる中で大神田隊員とコンニャク作りに挑戦するが上手く行かず、食べられたものの白身の刺し身は又もお預け。

アワンとアルーは12時30分にＣＩに着いたそうで、上部の天気は雨だがテントは張ったとの事。

ここ数日、肉けが少なくなったと思ったらランカーズで仕入れた生肉が切れたらしく、連絡官がマヨン村から羊肉を買う手筈と知る。そう言えばＢＣ入りした時に比べ、マヨン村からやって来る者が少なくなってＢＣも静かな感じ。

17時からの夕食の後は明るい内に自テントに戻り、明日に備える。夜になって雨が降るが、大した事なく終わる。

８月５日　暑くて適わぬ程に一日中晴れの好天。

今日も７時起床の７時半から朝食。８時半に我々３人にアワンとプブーを加えた５人でＣＩへ出発。10時にデポ地点に到着し、登る度に所要時間が短

▲ＢＣにも「ＨＡＪ」の石造りの記念文字が

縮。ところがアワンたちが担ぎ上げて来た荷物が指示した物と違っていてビックリ。しかし今の所、ＣＩでの必要品は全て荷揚げ済なので実害はなし。

滝上からは左サイドのガレ場を登らず、その右手のモレーンと氷河の間のルンゼ（下を水が流れている）状の雪面を登る。ガレ場よりもはるかに安定していて登り易い。

コルへの登りに入って先行するアワンとプブーが途中で何やらしていると思ったら、これがフィックスロープを張っていたのだ。彼らは２本のロープを張った後で私に確認して欲しかったらしく随分長い間待っていたが余りの遅さに痺れを切らしてＣＩへ向かったが、私がフィックスロープに登り着いたら張り方に間違いが何ケ所かあり、それを大神田隊員と直しながらの登行となる。

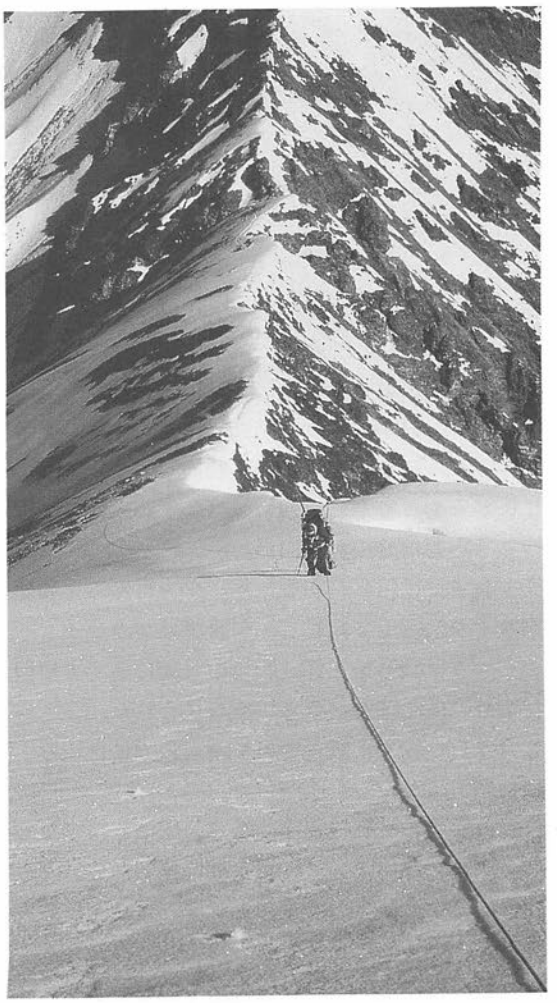
清華大学隊の残したコルからのフィックスロープを利用しての登りの途中でＣＩでのデポを終えたアワンとプブーとすれ違った後、我々も16時に相前後してＣＩに登り着く。自分では身体の切れが悪いし荷物を担いでいるので、のろまな歩みをしていると感じていたが、二日前の空身同然の時よりも随分早い。矢張り身体が高度に順応して来たのであろう。

時間も残り少ないので急いで荷物をデポして下山にかかる。コルからの雪面で下降器を使い慣れない柳隊員が手こずり、デポ地点まで少し遅れ気味で下って来る。

18時に滝上のテラスまで登るが、この頃になって漸く足の運びが楽になる。20分で下り着いたデポ地点で靴の履き替えなどで一息ついた後、山陰に夕日の沈むのを見ながら下りを続けて薄暮の19時半に漸くＢＣへ帰着し、今日の任務を何とか終える。大神田隊員のアイゼンの具合が悪いと言うのが気になる。

装備を解くと同時の夕食には今日の昼にマヨン村から届いた羊肉料理が出て、大いに食べさせて貰う。久し振りに日が暮れてからの食事だったので22時頃までメステントで過ごしてから眠りに就く。ところが昼間のハードワークで疲れているのに逆に熱けが出たのか暑くて堪らず、何時も着ているものを脱いでも眠れない時間が長く続いた夜になった。夜中に用足しに出ると昨夜の満天程でもないが流星も見られる星空で、今後の好天を期待する。しかし明け方に又も小雨が降って天気は全く予想がつかない。

▼ＣⅡを目指して西稜を行く（彼方にＣＩ）



８月６日　概ね晴れの一日。

今日はハイポーターも含めて全員が休養。熟睡出来ぬままに７時半に目が覚める。朝方にかけて降っていた小雨は周りが明るくなる頃には止み、天気は回復の兆し。

９時過ぎになってシュラフに閉じ込めていた身体を解放、11時からのブランチまでの時間を身の回り品の整理や今後のタクティクスの検討とＣＩへの荷揚げ品の確認などで過ごす。アルーがヘッテンを持っていないと言うので予備用を貸す。体調は気だるさが有り、今一つすっきりしない。

食後は流れで洗濯や洗髪をし、乾くのを待ちながら河原で大神田隊員や雑役夫のチベッタンと一

▼ＢＣ付近に咲くブルー・ポピー

緒にマヨン村からやって来た13～４才くらいの娘を相手に一時を過ごす。全く物怖じしない子なのに後からやって来た母親と妹は恥ずかしがって近づこうとしないのが面白い。

夕食までに缶ビールを一本。夕方になって強風が吹くが、暫くで収まる。夕食事はブランディーのヒマラヤ割りを三杯。明日の行動に備えて早目に眠りに就く。この夜も星空が見られた。

８月７日　夜半に降っていた雨も朝方には止み、概ね晴天。ただ少し肌寒い。

これまでの行動日同様、７時起床の７時半から朝食。今日はいよいよＣＩ入りの日である。

８時半に荷揚げのアルーとププーを加えた５人でＢＣ出発。ところがすぐの渡渉で足を滑らせ、片足は靴は勿論、ズボンも膝辺りまですぶ濡れ。しかしデポ地点で靴は登山靴と履き替えるしズボンも天気が良いので乾くから行動には支障なし。荷物がかなり多いのに結構スピード早く登れ、デポ地点には10時半に到着。ここで又もアルーたちに驚かされる。何と彼らもＣＩステイのつもりだったらしく、シュラフなどを担ぎ上げて来てたのだ。明日もう一度荷揚げがあるからと幕営具をデポさせてＣＩへと再出発。滝上に12時、フィックスロープ取り付き14時、コル到着15時と先々のペースで、ＣＩには10分かかって登り出る。ところが又々ビックリ。何とテントが三張りもしてあったのだ。二張りは我々の共同装備だが、もう一張りはＨＡＰたちの持ち物だったから一層驚く。余程彼らは登頂したいのだろう。

彼らには荷物をデポさせた後、すぐ下山さす。遅れていた柳隊員が16時に到着。テントの中は水が溜まっているし張り方も張る場所も悪くて斜傾していて一つには３人は入れず、柳隊員と私、大神田隊員の二組に分かれて入る。

17時に五目チラシ寿司でＣＩ入りを祝い、18時の交信を済ませてから眠りに就く。床がガレ場の為にデコボコで寝にくいＣＩ初日となった。

８月８日　殆ど崩れの無い安定した天気の一日。

今日からＣⅡへのルート工作。訓練では何度か経験は有るもののヒマラヤ登山本番でフィックスロープ張りのトップを務めるのは初めてだけに緊張が走る。

５時に起きて予定より30分遅れの７時半に出発する。大神田隊員と柳隊員には夫々フィックスロープ５本とスノーバー10本、私はフィックスロープ３本とスノーバー６本を持つ。

雪面が所々に残る岩場帯を30分程で越え、雪面が広がる斜面に出てからフィックスを始める。初めての事なので最初の内は思うに任せないが、何本か張って行く内に次第に慣れて来る。二番手でビレーを受け持つ大神田隊員も同じ思いだろう。柳隊員は少し遅れて登って来る。左側が切れ落ちて雪庇になっているので寄らない様にルートを取ってはいるが、気が付くと左に寄っているのが不思議だ。途中の交信を大神田隊員に代わって貰った後で受け取ったトランシーバーをポケットにしまおうとした時に落とし、あっという間に氷河へと流してしまうへまを仕出かす。どうしたものかと思いながらルート工作を続けている内に荷揚げにＣＩへ登って来るＨＡＰが見え、申し訳ないが柳隊員に彼らの持っているトランシーバーを貰って呉れる様に下山して貰う。

ルートは登る程に傾斜を増して中々高度を稼げない。しかし傾斜は慣れて来ると大した事も無くなる。フィックスを８ピッチ終わった所で16時になり、大神田隊員も私も疲れが強いので残りのロープをデポして今日のルート工作を終わる。高度は6000ｍを越えた辺りで余り出来は良く無いが、初日なので仕方ない。ＣＩには２時間で下山。柳隊員がトランシーバーを預かって呉れていてヤレヤレ。夕食を済ませ、早々と眠りに就く。

８月９日　晴れたり曇ったり。

昨日同様５時に起きて７時半にルート工作に出

発。途中にヒドンクレバスがあるのが分かり、これを避ける為のロープの張替などに時間を取られる。昨日の終了地点からフィックスを再開。視界が良くなったり悪くなったりを繰り返すし、傾斜は更に増してルートは延びない。12時の交信で明日のCⅡ荷揚げに備えてHAP2人がCⅠへ出発したとの連絡を受ける。6ピッチ目を登り終えてロープを固定しようとしている時に先端を離してしまい、これも止める間もなく5ピッチ目へと落下させてしまう。時間も18時を迎え、疲れも酷いので仕方なくルート工作を打ち切り、残りのロープを残置してCⅠへ戻る事にする。CⅠにはアワンとアルーの迎えを受けて20時に帰着。すぐに夕食とし、食後程なく自テントに戻って眠る。

8月10日、概ね晴れたり曇ったり。

今日も5時に起きて出発準備をするが、アワンたちにCⅡへ荷揚げさす物を取り出すのに手間取り、出発が8時前になってしまう。

明け方に降っていた小雪が止んで天気の回復を期待しながらフィックスロープを攀じて行く。ところが途中で柳隊員から体力に自信がないので登山を止めると申し出られる。それで取り敢えずCⅠへ引き返して貰い、後は大神田隊員と2人でルート工作を続ける。程なく2時間遅れでCⅠを出発したアワンたちに追いつかれ、彼らに急がされるが如くに昨日の最終地点からフィックスを再開する。しかし張り直しや経験不足、それに時間の経過と共に雪が腐って来るのが影響し、後少しと思えるのにルートは延びず、結局3ピッチ半張り終えた6300m地点で18時半になってしまう。CⅡ予定地の6400mのプラトーまでは後2～3ピッチだろうが、天気も悪化の兆しなので今日も又CⅡへ至らず、そこにフィックスロープやアワンたちが荷揚げして呉れた幕営具をデポしてCⅠへ下る事になる。

アワンたちは下山し始めたらアッと言う間で、大神田隊員と二人で必死に後を追うが、湿性の雪に足を取られて思うに任せない。途中からは雷雨に見舞われ、頭上で稲光る雷からの静電気で髪の毛が立つと言う初めての経験をしながら身を縮めて下りを続け、最後にはピッケを投げ出して這々の体でCⅠに20時10分帰着。こんな恐ろしい目には二度とあいたくない。

▼CⅡへの登り（下方に氷河湖を俯瞰）

この日最後の交信で、隊長から今後のタクティクスを見直す必要があるので明日は一旦BCまで下山せよとの命令を受ける。

食後はする事も無く、すぐにシュラフに潜る。

8月11日　曇り－晴れ－曇り－雷雨－快晴。

7時に起床し、食事の支度をしながら8時の交信を済ます。食後、下山準備をするが、登山をリタイヤした柳隊員は個装を全部降ろさねばならないのでザックが膨らみ切るほど多い。

10時にCⅠを後に下山開始。流石に柳隊員は荷物の重たさに苦しそうで少し遅れ気味。12時に滝上を通過し、デポ地点で登山靴をスニーカーに履き替えるなどしてからBCへ下る。柳隊員は更に個装を詰めねばならず、遅れて帰るからと後に残る。大神田隊員と私も急いだ精もあり、くたくたになって13時半にBCへ帰着。四日ぶりの煙草が何とも旨い。それに連絡官の作って呉れたシシカバブーも嬉しい限り。

マヨン村から羊を追って来た子供たちが大勢訪れ、雨が降り出しても中々帰ろうとせずに、BCは久し振りの賑いとか。

18時からの夕食時に隊長から明日以降のタクティクスが示される。明日から二日間の休養後、アタック体勢に入り、14日にCⅠ入り、15日はCⅡ建設してCⅠ下山、16日にCⅡ入り、17日に頂上アタックとするが、アタックの機会は一度だけとし、7時間で頂稜に届かなければアタックを中止し下山せよとの指示である。柳隊員の抜けた穴にHAPのアワンを連れて行くが、我々二人が登れない場合は彼にもアタックを中止させ、あくまでもサポー

▼CⅡ（6,400m）の樋上（左）と大神田

ターとして同行して貰う方針である。

食事では明日が休みなので缶ビール三本にブランディーの湯割りと、これまた久し振りに胃をアルコールで満たす。21時前に雷雨となり食後の会話時間はお開き。日が暮れてから天気が回復して快晴の夜となる。三日月を見るにも久し振りだ。

8月12日　晴れたり曇ったりの一日。

8時に目が覚め、コーヒータイムなどで休養日のブランチまでの時間を潰す。11時からの食事の後は洗濯と髭剃り。2人の羊飼いの女の子がやって来てBCを賑わす。アタックに加われないと知ってかアルーとプブーは不機嫌そうで、連絡官からも何とかならないかと言われるが、こればかりはどうにもならない。

松舘正義氏から差し入れのスルメを大神田隊員が味付けしたのを肴に缶ビールを2本。矢張り休日はのんびり出来る。

明日も休養日なので18時からの夕食ではアルコールを少し多めに飲んで21時に眠りに就く。夜中に少し雨が降る。明け方には腰痛、夜には歯ぐきが痛み出したのが気懸かり。何とか14日までには直さねばとシップを張ったりマイシンと鎮痛剤を飲んだりの薬漬けとなった。

8月13日　一日中殆ど曇り。

夜中に歯ぐきの痛みが増して眠れず、用足しには四度も起き出る。

8時半にシュラフを抜け出し、先ずはコーヒータイム。11時からのブランチの後は終日する事も無くブラブラ。大神田隊員がゴミを焼却するのを手伝った後、昨日直らなかった彼女のアイゼンを再点検。後ろの微調整ネジを昨日と逆に回したらぴったり登山靴に合って事が一件落着。

夕食後は明日からの行動に備えて早目の就寝。腰痛も歯ぐきの痛みも何とか治まり、これで安心して行動が出来る。

8月14日　一日中晴れの良い天気。

何時もの様に7時に起きて7時半に朝食。食後すぐに移動する準備をし、8時半に隊長始めBCにいる全員の見送りを受けて大神田隊員と2人でCⅠへ向かう。同行のアワンは後で出発すると言う事だが、登るスピードが早いから、すぐ追いつくだろう。

二日間の休みが効いたのか天気がよい精なのかこれまでよりもハイペースで登れ、CⅠには14時に着く。それでも矢張りアワンには途中で追いつかれ、追い越されてのCⅠ入りである。

三張りのテントに1人づつが入ると言う外目には贅沢な感じだがテント下の雪が解けて傾きが激しさを増したテント内は一人分の寝るスペースを確保するのが精一杯の状態。それに陽が射すとテント内は蒸し風呂状態になって暑くて堪らない。

夕食後は明日に備えて早目に就寝。

8月15日　殆ど晴天の一日。

5時に起きて朝食を済ます。準備が出来た7時半にCⅡへ向けて出発。今日こそは絶対登り着かねば後が無いとの思いが走る。足の早いアワンには少し遅れて出発して貰う。フィックスロープは二日間の空白で雪に埋もれてしまい、掘り出しながらの登行は結構疲れる。途中から程なく追いついたアワンにフィックス終了地点まで先頭を登らせ、少し疲れを癒す。終了地点でデポ品をザックに詰め込んだ後は再び先頭に立ってロープを延ば

▲BCで憩うHAP＆コックの3人

す。残っていた半ピッチと２ピッチ張り終えたら広いプラトーに登り着き、奥に続く斜面との際に赤旗の立つのを見てＣⅡ予定地に到着した事を知る。丁度14時を迎え、定時交信で隊長にＣⅡ到着を知らせる。赤旗は精華大学隊のものらしい。

プラトーの中央付近にテントを張ってＣⅡの建

▲ＢＣに遊びに来た珍鳥

▶ＢＣ周辺は草花が溢れていた

▶ＢＣ周辺の草原には鳴きウサギの住処がたくさんある。

▲ラサではチベット登山協会の元幹部が歓迎してくれた。左から高謀興、洛桑達瓦、成天亮、ドジブ各氏。

▲西稜を登高中のメンバー（ＢＣから）

設を済ませ、フィックスロープなどをデポしてＣＩには16時に下山を始める。

２時間でＣＩへ戻り、夕食後はすぐに眠りに就くが、あれこれと今後の事を考えると中々寝つかれぬ夜になってしまった。

８月16日　概ね晴れの一日。

６時に起床して８時前にＣⅡへの移動開始。シュラフなどの個装を担いでいる割りには余り負担を感じず、14時前にＣⅡ到着。

天気が良過ぎてテントの中はＣＩ同様に暑くて堪らない。明日のアタックのタクティクスを確認し、夫々に担いで貰うフィックスロープなどの割当を指示する。３人がメインザイルでアンザイレンし、頂稜に７時間で届かぬ時には登頂断念との事も念を押す。大神田隊員から自分が途中で登れなくなった時はアワンと２人でアタックして欲しいと言われるが、そんな事は出来る筈も無い。

隊長からの無線で連絡官は予定より一日早くロンライカンリ隊へ向かったと知る。

17時から夕食を摂り、陽のある内にシュラフに潜る。５時に出発と考えていた明日のアタックは隊長から遅いと叱責を受けて４時に早める。

８月17日　晴れ時々曇り。

２時に起きて早飯を済ませ、４時に頂上目指してアタック開始。外は言うまでも無く真っ暗で、曇っているのか星も殆ど見えない。大神田隊員を真ん中に私が先頭で３人がアンザイレンし、正面の斜面に取り付く。暗い精もあって傾斜が相当ある様に感じる。想像していた以上に寒く、手足が痺れる程だ。良く締まった雪面をひたすら上へ上へと登り続けるが、思う様には高度は上がらないのが苛立たしい。途中で大神田隊員のヘッテンが消えたので電池を変えて貰う。やがて陽が昇り出して暖かさが戻って来るが、最初に目指す頂稜には一向に手が届かず、時間だけがどんどん過ぎて行く。既にＢＣの隊長には我々の登っている様子を望遠レンズで捕らえられていると思うと頑張ろうとの気力は沸いて来るのだが、体力の無い身には如何ともしがたい。ラストのアワンも交代しようかと大神田隊員に言ったそうだが、代わって貰う訳には行かない登山である。頑張れるだけ頑張ったつもり。しかし到頭、出発から７時間が経過し

た。目指す頂稜は未々先に見える。隊長から無線で未だ登れと指示が出て、更に１時間の登行を続ける。それでも頂稜には届かず11時40分を迎えたところでアタック断念が決まる。6700ｍ地点で今年のヒマラヤ登山は幕を閉じた。悔いよりもトップでここまで登れた事に感慨が走る。

アワンも快く下山受け入れ、下り始める。登るより下る方が厳しい。持参のフィックスロープを張りながら下って行くが、慣れない大神田隊員には一苦労だったらしい。

ＣⅡに戻り、時間も有るので今日はＣＩまで下る事にして幕場を撤収。アワンは一気にＢＣまで下ると言って先に降りて行く。ここからＣＩへはロープが張ってあるので大した事なく下る。

ＣＩへ戻り、残りの食糧で夕食を済ます。明日はＢＣかと思うと、あっけない幕切れの様にも感じられるが、多くの事を初めて経験した中身の濃い登山をさせて貰えたと隊長には感謝したい。そんな思いを抱きながらの眠りであった。

８月18日　概ね晴れの一日。夜に雷雨有り。

７時に起床するが、夜半から吹き続ける強風でかなり寒い。８時の隊長との交信でＨＡＰ二人が荷下ろしに登って来る事を確認。朝食を済ませてから下山準備。個装のザック詰めとＨＡＰに降ろさせる荷物を纏める。

10時の交信でＨＡＰが着く前の下山許可が出たのですぐさま下山開始。コルからの下りは雪がすっかり融けてガレ場と化していたが、その下部に残っていた雪の斜面は昨夜からの強風でクラフトしていてアイゼン無しでは下れない状態で、大神田隊員が動けなくなる一幕も。

11時半、滝上で一休み中のアワンとプブーに出合う。２人には荷下ろし品の説明をして別れる。12時15分にデポ地点に帰着。デポしてある個装をザックに詰め、スコップなどの残っていた隊荷をアワンらに降ろす様にメモしてＢＣへと向かう。

12時の交信で隊長に伝えた通りの13時半に懐しのＢＣへ帰還。隊長、柳隊員、アルーの出迎えを受ける。隊長からは暖かい慰労の言葉を頂く。私の今年の登山が幕を閉じた事を実感。毎年、涙を零す場面だが、今年は自分なりに納得行く精一杯の登山が出来た精か涙は出ない。暖かい飲み物を

▼登頂を断念し下降中のメンバー（上に到達点）

貰いながら先ずは煙草に手を出す。五日ぶりの煙が肺の中に充満。しかし思った程には旨さを感じない。

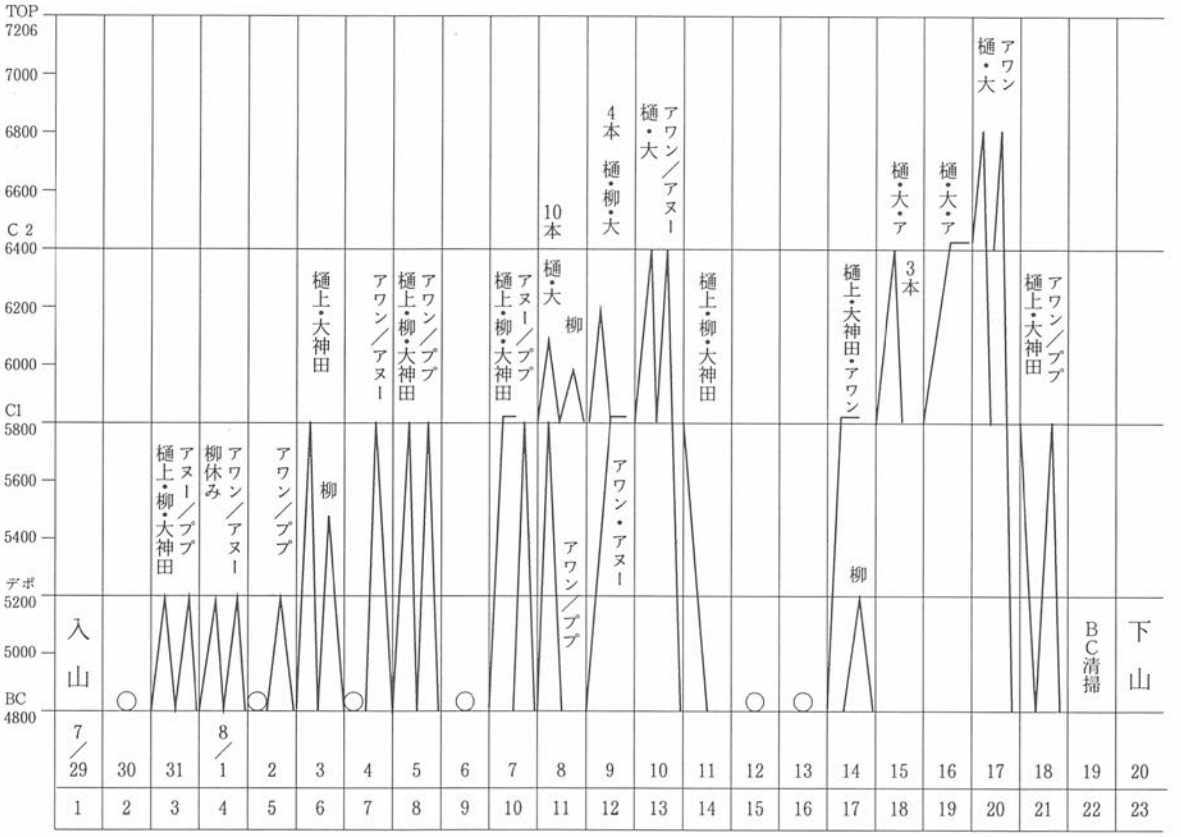
装備を解くのを待って呉れての昼食で、これまた五日ぶりの缶ビールとＢＣ食で胃袋も大満足。暫く自テントで休養している内にＨＡＰ２人が16時に帰って来る。デポ地点の残置品も全部担ぎ降ろして呉れていたので一安心。

18時から始まった夕食は、ＨＡＰも含めた７人全員で無事の下山を祝しての宴となる。何時もの料理の他に鰻の蒲焼、松舘氏差し入れの蟹とウニの缶詰めなど豪華な料理が食卓を埋め、ＨＡＰも初めて口にする味におっかなびっくりの様子である。私はもっぱらアルコールに手を出し、缶ビールの後は日本酒にウィスキーと痛飲、時間も分からぬままにシュラフに潜り込む始末であった。この夜も食事中に雷が僅かに鳴っていた。

８月19日　時々陽が射すが、殆ど曇りの一日。

今日は明日のＢＣ撤収に備えて一部の隊荷を梱包作業するだけなので遅めの起床を許される。しかし、そうは言っても目が覚めるとシュラフに潜り込んではおれず、８時頃からガサゴソし始め、コーヒータイムなどで朝食までの時間を潰す。

ＨＡＪ ニンチン・カンサ 2002　行動表



食後、すぐに梱包作業にかかり、倉庫代わりにしていたキッチンテントや大神田隊員のテントをたたむなど片付けられるものを大プラ７個と中プラ１個に納める。大神田隊員は明日朝まで隊長のメステントに同居である。作業は順調に進み、思っていた以上に短時間で終わってしまい、少し拍子抜け。

夕食までの時間を個装の整理などをしながら過ごすが谷奥の村からやって来たと言う少女たちがあれこれ欲しがって、テント周りは久し振りの賑いを見せていた。

夕食が始まって程なくすると又も雨が降り始める。大した降りではなく、一緒にやって来た雷もこれまで程の勢いは無い。少し天気の中身が変わって来たのかも。食後も暫くアルコールを楽しんでいたが、暗くなる少し前に自テントに戻って眠りに就く。雨は夜中も殆ど降り続いていた様で、雪も混じっている感じだった。

（記：樋上嘉秀）

■ＢＣを後に下山、そして帰国

８月19日（月）

８：30起床、雨が降っている。テント撤収作業は天気の回復を待ってからすることにし、各自休養とする。雨は間もなく上がって午後からテント撤収及びＢＣ周辺の整理清掃を行なう。作業は１時間余りで終わり、各自荷物の整理パックなどした後思い思いに過ごす。僕は、マヨン村から遊びに来た子どもたちと遊ぶ。中国語を使って色々話しかけて見るが、彼らは「うんうん」と頷くだけで全然通じない。彼らはテント内を覗き込んでは、食べ物が入っていると思われるような方を指差して、くれといった身振りをする。あるにはあるのだが切りがないので無視し、物々交換を申しいでる。いろいろ子どもなりに値踏み、駆け引きをす

るのが面白い。最後相手がはめていた指輪とキャップランプとを交換する。果たしてこの交換どちらが得をしたのだろうか。夕方から又雨となり、肌寒い。いよいよ明日はラサへ帰るのかと思うと20日余りの登山活動が思いよぎる。

8月20日（火）

朝起きると雲がかかっており、周りは雪がうっすらと積もっている。撤収は30分ほどで終わり、次々にヤクを連れたチベット人たちが集まってくる。

連絡官は次の業務のため、16日に急きょラサへ下りていったが、3人のチベット人若者がてきぱきと指図していて、我々4人は9時ベースキャンプをあとにする。途中でリタイアしたとはいえ、5,800メートルのC1に泊まり、6,100メートル位の高さまで行けたことは、ヒマラヤ初めての僕としてはよしとしなければなるまい。

雲は次第に上がり、ニンチン・カンサの中腹まで見えるようになってきた。来る時はどのようにして来たのか、わずか20日余り前のことなのに、しかとは思い出せない。白く雪化粧をして見送ってくれるニンチン・カンサ。こうして短い夏が終わり、秋が来て長い冬を迎えるのだろう。僕の初めてのヒマラヤ登山も終わろうとしている。いつかまた来ることがあるだろうか。

マヨン村には1時間ほどで着く。好奇心旺盛な村人が大勢見物に来ている。そこからジープとトラックで公路に出る。車は一刻も休まずラサへとひた走る。来るとき鼻血を出して、この先どうなるのかと不安でならなかったランカーズの町。空の青を映して果てしなく広がっているヤムドクツォ湖。草原を黄色く染める菜の花畑。さようなら。

4時間余りでラサ、ヒマラヤホテルに着く。何はともあれ、ビールで乾杯。無事帰還を祝い合う。

8月21日（水）

雨。午前中共同装備の整理をする。午後晴、八角街観光。1坪くらいの広さの露店が所狭しと並んでいる。よくもまあ商売が成り立つものだと感心する。

8月22日（木）

雨。9時頃上がる。午前中テントを乾かし整理。午後休養。

8月23日（金）

5時半起床、雨。空港へ。21日、22日成都空港大雨のため飛行機が来ず、今日はその補充便に乗る人でごった返している。我々の乗る便取消しとなっており、明日以降になるとのことであった。

ラサに引返し、別のホテルに泊まる。夕食は、ニマ・ツェリンの生徒たち、チベット登山協会の関係者と会食であった。

8月24日（土）

午前の便で出発するものと思っていたのに、連絡官からはなんの連絡もなく、やきもきする。11時半ごろになってようやく連絡が取れ、昼からの便で成都乗換え北京まで行くことになる。空港は相変わらず混み合っていて、しかも離陸時間がどうなっているのかアナウンスもないので、イライラして精神衛生上はなはだよろしくない。予定時間より大幅に遅れて成都へ出発。成都でもまた待たされて、北京には夜10時頃着いた。中国登山協会のメンバーと遅い夕食をとる。北京まで帰って来るとほっとする。

8月25日（日）

北京空港も観光客で混んでいて、チェックイン、安全検査等手続きに時間がかかる。空港からは東京組と関西組とに分かれる。ここでもまた、搭乗口がチケットの表示と違っており、しかも放送もない。1時間以上遅れて飛行機に乗り込んだときはぐったりしてしまった。山での疲れとはまた違った疲れである。何はともあれ、予定通り1か月ぶりに日本に帰って来た。

明日から、また日常的な生活が続くのだ。

（記：柳謙一）

▲前列右から山森、樋上。後列右から柳、大神田

ロー・マンタンの空、遥かなり(6)

カリガンダキ左岸の地図の空白部を行く

高橋　照

ゴレパーニー峠を目指して

ゴゥチャンのバッティの店先にも、大きな鍋に水を張って、ビール、コーラ、ジュースなどが置いてあった。これもご時勢なのだろう。メニューも大きなブリキ板にペンキで英語が書かれていた。このメニューの種類は何処も同じで、しかも書き順までが同じである。多分看板書きの行商が、一人で道々のバッティのメニュー書きの注文を受けたのだろう。私はビールを飲みながら、チャンドラ・ゴゥチャンと過ぎ日のことなどを話し合った。この街道筋のタカリからの最初の言葉はいつも決まったように、インドラマン・カジは元気かと、カトマンドゥに住んでいるインドラマン・シェルチャンの消息を尋ねられる。私がカトマンドゥに住みついているということを誰かの噂で知っているようだった。

「今日の行程はティルケドゥンガか、ヒッレーまでの予定のようだ。」と私が言うと、チャンドラ・ゴゥチャンは、

「スダミーのトラチャンが昨年から、ティルケドゥンガでホテルを始めたから、寄ってやってください」というので、

「スダミーには寄るつもりでいましたが、それではティルケドゥンガの彼のホテルに是非寄って見ることにしましょう」と約束した。スダミーのトラチャンは、グルカ兵として第二次世界大戦の時、インパール作戦に参加し、日本の敗戦直後、日本に進駐し東京の丸ノ内海上ビルに駐屯したことのある歴戦のつわものである。

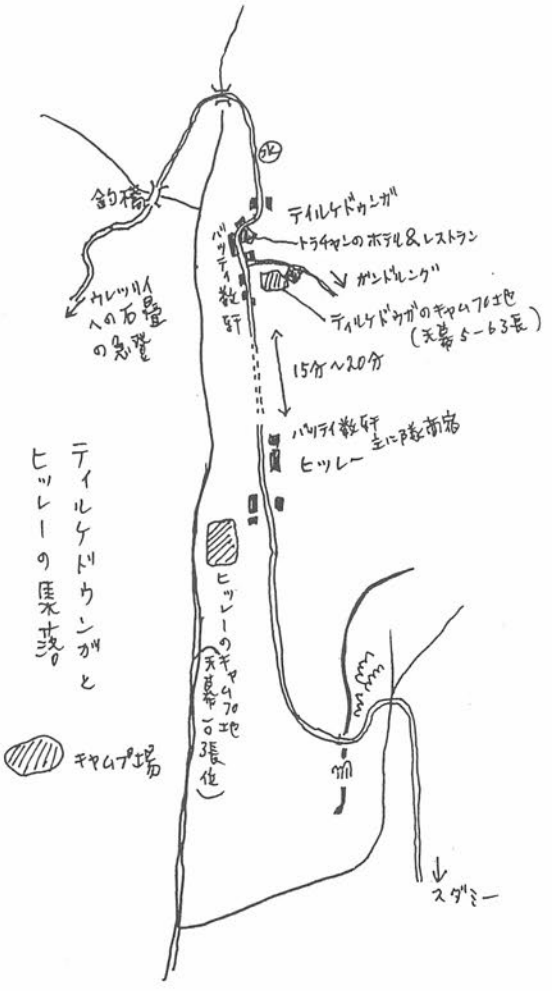
このビレタンティでも、ゴウチャンの裏の広い空地に、ヨーロッパ人向けの大きなホテルが出来ていた。彼等の喜びそうな別棟の食堂もあり、庭にも食卓が据えられていた。恐らくヨーロッパ人の好んで行く、アナンプルナ・ベースキャンプに行く登山口の入口に当たるので、カトマンドゥのエージェントが目をつけたのかも知れない。しかし、私達には全く無縁のものである。

正午一寸過ぎビレタンティのゴゥチャンのバッティを出発した。途中スダミーの少し手前にあった釣橋の位置が変わったのに気がつく。この4、5年間の間に流されて、新しい釣橋に架け換えられたのだろう。スダミーには3時頃着いた。トラチャンの家の前を通り過ぎる頃より、定期便の雷鳴が鳴り始め、大粒の雨になってきた。トラチャンの家で雨宿りするとだいぶ遅れてしまうので、その儘前進した。今日は傘を持っていたので雨の中を休まず登った。予定通り1時間程でヒッレーに着いた。左の方を見ると、段々になったたんぼの中に私達の天幕が張られたのを発見する。スダミーからこの辺にかけては水稲を栽培しているが、今は何も植わっていない。道路より水のたまった畦道を下って、炊事場の天幕に入った時は、雨は最高潮の降りだった。ポーター達はヒッレーに数軒ある隊商宿にそれぞれ引き上げたようだった。

翌朝ヒッレーを出発し、20分程で7時半頃ティルケドゥンガの集落に入った。トラチャンのホテルは2階建で集落の中央の曲がり角に建てられていた。白いルンギ（腰布）をまとったトラチャンが、家の中から私を見つけて出て来た。ここでもトラチャンは、

「あなたと会うのは5年振りですね」といって、

「インドラマン・カジは元気かね」と聞かれた。カトマンドゥのタカリの情報は私が一番良く知っていると思っているようだ。2、30分話し込んで別れをつげた。これからウッレリイ迄の石畳の急登と、ゴレパーニーまでの長い登りがあるので、余り長休みは出来ない。幸いなことに今日は雲が



出ているので、そう照りつけられることもない。しかし、やはりこの登りは何時来てもアゴを出す。最後の急な登りに掛かるところに水場があった。私はここで何時も腹一杯水を飲むのだが、水路が変わったのか今回は水が流れていなかった。そして、水場附近には咲き残りの石楠花が一株張り出していた。

3時間程掛かってやっとウッレリーの村の入口のバッティに着いた。私達の二人のナイケが休んでいて、

「ポーター達は全部追い上げてしまったので、バラ・サーブが一番最後ですよ」といわれた。この入口を占めているタカリのバッティの手前にも、道から外れた台地を見つけて数軒の新しいバッティが出来ていた。ティルケドンガよりウッレリーに行く最後の急坂に、しかもタカリのバッティの手前に、バッティを造ったとははおそれ入った次第である。こんな処にも、都会的な生存競争が入り込んで来たのを、見逃すわけにはいかない。

タカリのバッティで30分程休み、弁当も食べずに出発し隊の後を追った。ウッレリーより3、40分登ったところで、隊のポーター達に追いついた。連中はウッレリーで遅い朝食を食べたのだろう。

1時間程山腹道を登り切ると、いよいよゴレパーニーに続くジャンガル（森林）地帯である。そのジャンガルの入口に小沢が入り、ナヤンタンティの水場までは、谷に沿った道なのに水場がない。ところが、今度来て見て驚いた。ジャンガルの入口を切り開いて、新しいバッティが2軒建っていた。これからは全くの無人地帯なので、旅人には有難い存在だ。バッティの前を通るとタシが中から出て来て、なかなかいけるバッティだという。タシはここで昼食をとり3時間余りをここで私を待っていたようだ。

「バーバが遅れているので心配していましたが、割合早く着いたので安心しました」とタシが言うので、私は、

「俺はこの道を十回近くも通っているから、夜になったって一人でも大丈夫だよ」と強気な言葉を使ったものの、有難かった。そして、

「私はマイペースで行くから心配しなくっても良いよ。このあとポーターがまだ2、30人いるし、ナイケもいるから先に行って呉れ」といってバッティの中に入った。このバッティの前には、英語でブリキ板に書いた行程表があって、ウッレリーまで40分、ゴレパーニーまで1時間半と書かれていた。このバッティのサーヴィスなのだろうが、それにしてもこの時間はあくまでもネパール人のペースである。私にはその倍以上の時間がかかると思った。

タシと二人でバッティを出たが、みるみる中にタシの姿は見えなくなってしまった。タシならばこの標識より早くゴレパーニーに着いてしまうことだろう。

ジャンガルの中の湿った凸凹道を、上り下りして山腹道を行き、大きな支流を渡って1時間程でナヤン・タンティの台地に出た。スダミーのトラチャンの放牧場である。バッティが2軒あって、

ダラからは綺麗な水が落ちていた。バッティの前のチョータラには直径1メートル近くもあると思われる鉄パイプが10本以上立てかけてあった。タッコーラに計画中の水力発電のパイプだそうだ。おそらく7、80キロはあると思われるものだが、これを運ぶクーリー達は、私達と同じ日にポカラを発っているので、いままで私達と追いつ追われつここまで来たのである。ポーター賃はおそらく目方による契約と思われる。その証拠として1本背負っている者と、2本背負っている者が入るからである。機械文明の開発には最初は人力で始められるということを痛感し、その昔、日本でも黒四ダムの開発に芦峅の強力衆が重いゴムパイプやワイヤー・ロープを背負子につけて一の越を越えて御山谷を下って行ったことを思い出した。

ナヤン・タンティのバッティには、菊地君達が休んでいたので、

「あの向こうにある石造りの家が、ムスタン・ラージャがポカラに下る時に使う宿舎ですよ」というと、菊地君は顔色を変えて、

「中にリエゾンのビーム・バードルがいるから、ムスタンだとか、ラージャだとかいう言葉は口にしないで下さい。これからも絶対に禁句ですから」というので、

「判った。判った。だいぶビーム・バードルに苦情を言われているようですね。リエゾンのお守りご苦労さま」と私は笑いながら言った。菊地君は日ごとにリエゾンの額のしわが深くなって行くのでかなり神経を使っているようだ。リエゾンにしても、段々ジョムソムが近づいて来るので、小心者の彼としては上司の命令との板ばさみになって、悩んでいることは私には想像が出来た。

ナヤン・タンティからゴレパーニー峠までの道は、傾斜の緩い山腹道だが長かった。もう1カ月も早くここを通っていたら、満開の石楠花の真赤な花のトンネル道だが、今は全部散ってしまい、たゞところどころに色の薄れた石楠花の花の残骸が風に吹き寄せられていた。そして、木々にも春が訪れたのか新緑の黄緑が、太陽に映えて美しい。

四っ目のチョータラを過ぎたので、もう1コース（日本の1里ぐらい）は歩いたのだろう。1軒の新しい石造りの小さな小屋があり、老人が道を

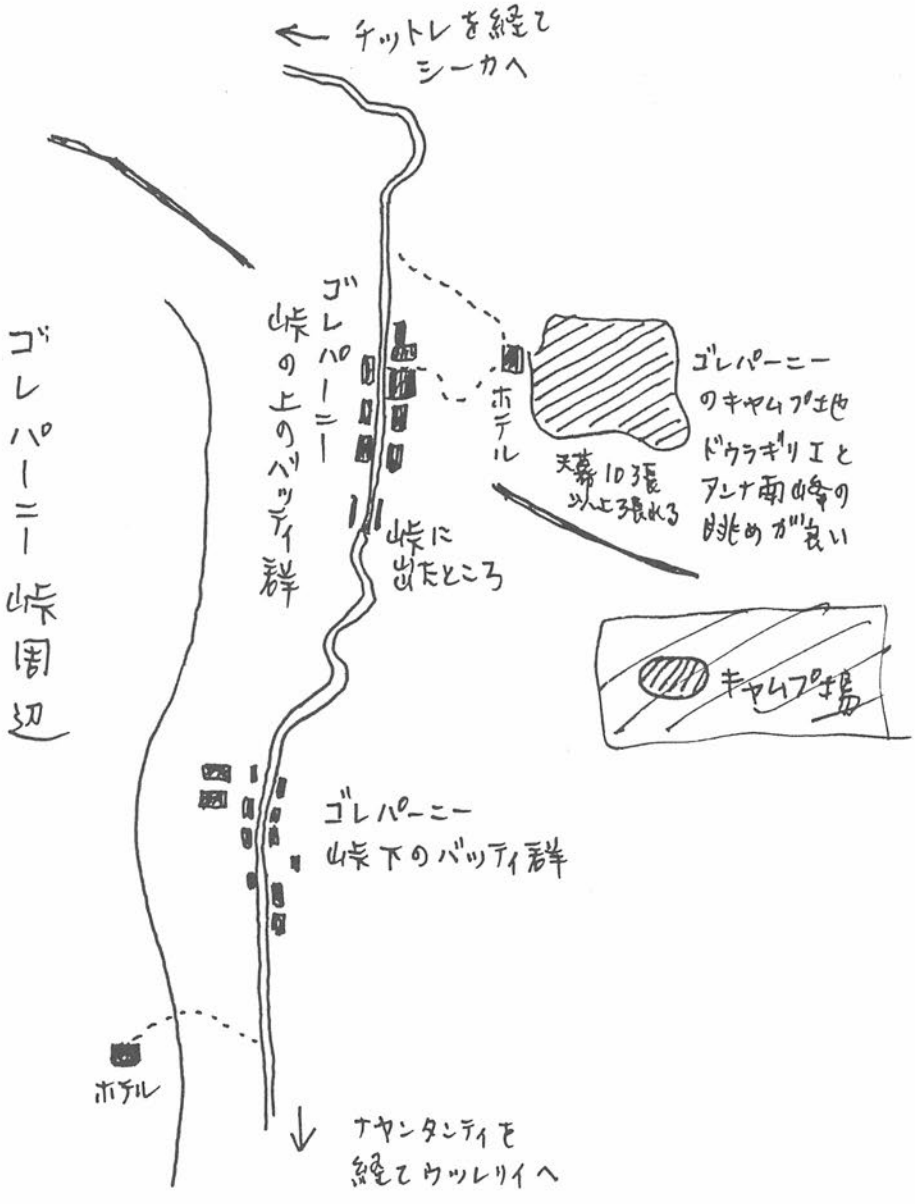
拡げていた。老人のそばにうづくまっていた大きな犬がいきなり飛び掛かって来た。眼を見るとあきらかに敵意を持っている。老人は制したが犬は低いうなり声を立てながら遠巻きにして、執拗にせまってくる。棒を振り上げても石を投げつけても、同じ間隔でついてくる。ついに、2、30分間も犬と睨み合いながら進んだ。4分の一コースも足速に歩いたろう。やがて犬のうなり声も遠のきホッとする。このコースというネパールの距離に使う尺度は、日本の大体1里（4キロ）に当たるが、普通その距離を4つのチョータラで区画されている。人間が重い荷物を背負った場合の1コースの距離内での休憩地点を計算してあるようだ。したがって、山道のように傾斜のきついところでは、1コースの距離がうんと縮まっているのが面白い。ネパールでは旅ということは、重い荷物を背負って、ただひたすら歩くことである。だから、このコースという言葉は、本来は尺度であるのに、標準の人間（30キロ位の荷物を担いだ人間）の一

定距離を進む距離と時間と労力をうまくコントロールした人間工学の尺度でもある。

犬に追われて夢中になって歩いたお陰か、気がついた時には前方にゴレパーニー峠下の集落が目に入った。集落の入り口から左に小沢を一つ越えた処に、大きなホテルが建っており、そこへ行く道の分岐点には大きな看板が立てられてあった。その文面を読むと、どんな物かは判らないが、バス、トイレ付きである。そしてバスはホット・ウォーターと注釈がつけられてあった。しばらく行った右側の英語の看板のバッティも、ホット・ウォーター・シャワーとトイレットの文字が目に入る。バッティの裏を見ると竹で作ったムシロで囲った掘立小屋にも、同じような文字を書いた板切れが打ちつけてある。欧米人を相手にしたホテルやバッティは、シャワーやバスが必要なのだろう。シャワーといってもドラム缶の水槽から水をパイプで引っ張ったものである。

バッティの前の大石のところに、女性を混じえた日本人のトレッカーが居り、私に挨拶した。そして、

「この先の峠の上に、日本の遠征隊が天幕を張っているので、見物に行きませんか」という。私がこのバッティの中をのぞいていたので、私が泊ま



るのだと思ったのだろう。時間は既に夕方の5時近かった。

「遠征隊はどの辺に天幕を張っているのですか」と私は尋ねた。ゴレパーニー峠の下ならキャンプ地は沢山あるのに、峠の上は森林地帯で、そんな場所があることは私は知らなかったからだ。

「この先300m位のところで、十分もあれば行けますよ」私はこの集落の先のシェルチャンのバッティの裏に一寸した広場があるので、天幕場はそこかと思っていたが、どうも峠の上らしい。私はこの道を何回となく通ってはいるが、天幕を持って来たことは一度もなく、何時もバッティ泊まりだったので、泊まり場については余り気にしなかったのである。

シェルチャンの旧い小さなバッティの前に末娘の女の子が一人で遊んでいた。

「アマ（お母さん）、バブー（お父さん）は家にいるかい？」女の子は首を振って、

「今家の中には誰もいない」というので、

「ぢゃー、デディ（お姉さん）は？」と聞くと

「今、ここには居ない。お嫁に行っちゃった」という。そうだろう、もう5年もここを通っていないのだから、お嫁に行っても当然のことだと私はうなづいた。シェルチャンの家の長女は、この街道筋ではタカリの隊商やポーター達のアイドルであった。なかなかの美人である。この辺のタカリの貧乏な家の娘は、自分達と同じ種族に大体限って春を売っており、その金で結婚の支度金にしているのが通例のようだ。北方系の民族はタカリに限らず、貞操観念がわれわれ日本人の考えていることとだいぶ違う。親達も余り気にしていないようだ。

シェルチャンのバッティの前には、大きな石造りの新しいバッティが出来ていた。隊商の連中がお得意らしい。昔は、木材で造られた小さなバッティで、カムバが経営していたが、カムバ事件後は何処に行ってしまったのか、ずーっと閉まっていた。このカムバは数年前、ムクチナートが外国人に門戸を開いた時、私はムクチナートに行き、その帰路二人のカムバと道連れになった。その二人のカムバがそのバッティをやっていたことを思い出した。

峠の登りは流水で荒れていた。そして、泥んこのぬかるみ道を登り切ると、ゴレパーニー峠上のバッティ群があった。バッティ群の真中あたりにシェルパのポーターが一人立っていて、

「バラ・サーブ。天幕場はこの横道を入って少し行くと判りますよ」というので、小道を入って行くと、森林帯が切れ、眺めの良い台地の上に新しいホテルが建っていた。ホテルの小さな中庭には、ヨーロッパ人の天幕が2張り張られていた。そして、その先の草地の広い台地に、私達の天幕が立ち並び、炊事場では今や夕餉の仕度に取りかかっていた。

私は隊員達よりは3時間以上も遅れて、夕方の5時少し廻った頃、本日の宿営地、ゴレパーニー峠の私達の天幕の中に入った。

眼前にはアンナプルナ南峰が手の届きそうなところに峙ち、その反対側にはドウラギリ主峰の南壁の偉容とトゥクチェ・ピークの連嶺が広がっていた。

初めてネパールを訪れたトレッカー達が、ポカラより初めて眺めるアンナプルナ連山の偉容に驚きの目を見張り、そして、このゴレパーニーの丘に立った時、更に驚きの目でドウラギリの偉容に接し、感激の極致に達するのである。

ＨＡＪ創立35周年記念誌を販売

10月1日に創立満35年を迎えたＨＡＪでは、35年を記念して「雪の住処35年の記録」を刊行しましたが、以下の要領で販売します。

記

1．Ｂ5判　本文277頁　カラー4頁、モノクロ24頁

2．価格：ＨＡＪ会員2500円、一般3000円
　　送料450円

3．申し込み：郵便振替　00100-6-48954
　　日本ヒマラヤ協会

通信欄に「雪の住処」と記入して下さい。

ＨＡＪ隊ＧⅠ(8,068ｍ)登頂と救助速報

ＨＡＪカラコルム連続登山隊　**野沢井　歩**

8月3日　ＢＣ～Ｃ２

4日　Ｃ３（7,100ｍ）建設

5日　2:45アタック出発（田辺・野沢井）、（岩崎・後藤）パーティに別れて行動。

12:40～14:00に掛けて４名全員登頂（野沢井、田辺、岩崎、後藤の順番）

14:30 下山開始、直後、岩崎ザックを落とす。

20:00 田辺、野沢井パーティ　Ｃ３着。その後岩崎、後藤パーティは下山ルートを見失いビバークに入る。

23:00から02:00に掛けて田辺、野沢井で上部に捜索に行くが２人を発見できず。（無線は通じていた）

6日　11:00　Ｃ３へ自力で戻る。

7日　7:30　Ｃ３よりジャパニーズ・クーロワールを下降。

11:00　Ｃ２着

13:00　約6,200ｍ地点で後藤が急性高山病に陥り自力歩行が困難となる。その後岩崎クレバスにはまる。

15:30　先行していた、田辺、野沢井パーティー登りかえす。

17:00　後藤を6,000ｍ地点プラトーまで降ろす。（後藤の症状：言語障害、運動障害で一人での歩行も困難であった）

8日　9:00　6,000ｍ地点出発。自力歩行は不可能で、ツエルトでくるみ引っ張り降ろす。

15:00　5,850ｍ泊。リエゾンにＣ１までのヘリコプターの救助要請するが不可能との返事。

9日　2:30　田辺、野沢井でＢＣへ酸素ボンベを取りに下山。

7:00　ＢＣ着。Ｋ２労山隊、近藤和美隊長へ救助要請を手紙で出す。（労山隊はＫ２をあきらめＧⅡへ向かっている途中であった。）

17:50　田辺、野沢井5,850ｍ地点へ帰着。夜から酸素吸入（１ℓ／分）

10日　デキサメタゾン８㎎を注射。※連日経口でデキサメタゾンを投与していた。

6:00　5,850ｍ地点出発。（酸素２ℓ／分を投与）クレバス・スノーブリッジの通過は四つんばいで通す。

11:00　5,750ｍ地点泊。

11日　6:00　5,750ｍ地点発。後藤衰弱が激しくスピードが落ちる。

12:00　労山隊のＨＡＰ（フセイン）、我が隊のコック（アスカリ）が酸素、スノーボードを担いでヘルプに来た。スノーボード（荷物用で小さい、アーミーから借用）に後藤を引きずり降ろす。

14:20　5,500ｍ地点泊。フセイン、アスカリはＢＣへ。

12日　7:30　5,500ｍ発。

10:00　労山隊近藤隊長以下４名、フセインと合流。人数が増えた為スピードが格段に伸びた。南ガッシャーブルム氷河のアイスフォールを一挙に降ろした。

15:30　ＢＣ着。

13日～15日　ＢＣは悪天。ヘリは飛んでこない。シャクリーンにある労山隊の酸素を取りに行く。連日酸素吸入を行なった。

16日　快晴。12時過ぎヘリコプター来る。後藤、に付き添いで野沢井、リエゾンが乗り込む。コンコルディア、パイユを経由してスカルドへ。

スカルドのホテルで着替えた後、ＤＨＱ（病院）へ。医者の診察、点滴を行なう。

17日　イスラマ行の飛行機には乗れず、引き続き点滴を受ける。

18日　10:30の飛行機にてイスラマバードへイスラマバード着後病院で診察及び点滴。夕方ラベンダーホテルにて休養。

21:00　イスラマバード空港へ。日・パトラベルの力で無事に航空機へ乗る事が出来た。

19日　北京経由で成田へ定刻12:30着。

「境町山の会」の仲間と共に群馬・藤岡の病院へ入院（脳浮腫及び血栓）

※本隊、岩崎、田辺両氏は隊荷と共にキャラバン。田辺８月30日、岩崎９月２日帰国。

地域ニュース

《ネパール》

タシカンⅠ(6,386m)に初登頂

東京都勤労者山岳連盟が、ダウラギリ山群のタシカンに派遣した登山隊(石原裕一郎隊長(40)ら21名)は、8月14日、岩崎照幸(55)、河野千鶴子(55)、茂木康枝(52)、片倉昭江(48)4隊員が初登頂に成功した。

クラブ・イエティー隊がガウギリ(6,110m)峰へ

クラブ・イエティーでは、昨年新開禁峰となった、ムスタン、ダモダール・ヒマラヤのガウギリ峰へ登山隊(石井清(53))を派遣した。同隊は9月下旬同峰を目指す予定。尚、同峰は今春、アメリカ隊によって登頂されたことになっているが、山が異る可能性もあるとの情報もある。

《パキスタン》

スパンティーク(7,027m)の明暗

鉄腕モトム高所登山学校隊(大宮求隊長(53)ら7名)は、8月21日、南東稜から田中勝彦(63)、大塚定吉(60)、古賀元博(64)、室本朋久(35)の4隊員が登頂に成功した。

一方、宇都宮勤労者山の会隊(森初芳隊長(57)ら2名)は、8月24日昼すぎにBCに到着(大宮求氏の情報)。登山活動の詳細は現在のところ不明であるが、栃木県勤労者山岳連盟による「登山遭難報告書」によれば、2名はスパンティーク登頂後、C3(6,200m付近)テント内で2日停滞中の9月2日～3日の真夜中に斎藤賢治(59)隊員が死亡。その後3日間悪天候のため下山できず。天気回復を待って、遺体を置いて森隊長が下山。現地で人を募り、遺体収容に向かったが、雪が深く収容を断念した。森隊長も手指6本、左足指1本に凍傷を負った。

この遭難により日本隊は、1968年以来、35年連続して死亡事故が発生したことになった。

《中国》

ムスターグ・アタで高齢者が活躍

名峰ムスターグ・アタ(7,546m)に入山した日本隊で高齢者の登頂が相次いだ。

南井英弘隊長(66)と池谷健(64)のパーティは、パキスタンから2名の高所協力員(HAP)を同行して7月9日にBCを建設。7月26日に4名でC3(6,700m)から頂上を往復した。

千葉富夫隊長(66)と出堀宏明(65)のパーティは、ウルムチ～カシュガルから入山。荷上げなど半分以上を自力で行い、高山病にもかからず、登頂まで8日間かけ8月11日に登頂。下山は毎日吹雪で5日間かけBCへ下山した。

山野井泰史がギャチュン・カン北壁へ

山野井泰史(37)が中国(チベット)側からギャチュン・カン(7,982m)の北壁を単独登頂するため入山した。

トピックス

海外の山を知ろう！Part 8

山野井泰史のクライミング
(格安で登れるカラコルムのクライミング)

パキスタンの場合、6000m未満の山は、特別な手続きを必要とせず手軽に登る事が出来る。それを利用して格安でレディース・フィンガー、ソスブン無名峰、ビャヒラヒ・タワー等、カラコルムのビッグウォールを楽しんだ山野井泰史からお話を伺います。

主催：東京都山岳連盟・海外委員会
期日：11月14日(木)　19:00～21:00(18:30より受付)
場所：豊島区立勤労福祉会館　03-3980-3131
参加費：500円(当日会場にて)
問い合わせ先：東京都山岳連盟・東京都中央区京橋1－9－9　湘南産業八重洲ビル401
TEL　03-5524-5231　月～金 13:00～17:00

ヒマラヤから

チョー・オユー便り

やっとラサに着きました。　（橋本しをり）

出発前は情報等ありがとうございました。ラサは連日雨が続いています。無理せずゆっくり行きたいです。　（恩田真砂美）

日・中友好チュー・オユー女子合同登山隊2002

タルン・ピーク便り

ナマステ！

出発の際はいろいろありがとうございました。カトマンズでの準備も終わり、9／10陸路バサンタプールへ向います。2週間以上かかる長い長いアプローチをゆっくり楽しみながら、ヒマラヤ登山をじっくりと満喫したいと思います。このエリアへの入山は初めてなので慎重にとりくみたいと思います。　2002.9.9　カトマンズにて

ヒドンヒマラヤクラブ　林　雅樹

創立35周年記念行事資金協力者(3)

〔20口〕丸山博司　2002年9月30日現在

〔5口〕中川裕、野沢井歩

〔3口〕石川龍彦、柴田金之助、出口當、保坂昭憲

〔2口〕菅原和明、谷田川武、田辺治、松木克雄、渡辺斉

〔1口〕伊東満、及川美奈子、大宮求、桶川和気夫、喜内敏夫、古関正雄、香取純、志村真由美、鈴木正典、高田幸子、千葉良正、辻野健治、中谷正秀、松舘正義、森谷信次、柳謙一、吉田秀樹

29名　690,000円

総合計　140名　1団体　3,140,000円

東京集会のお知らせ

日　時　10月28日（月）午後7時～

内　容　ニンチン・カンサ報告

場　所　ＨＡＪルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分）又は、ＪＲ大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

2003年ＨＡＪ登山隊隊員募集

八千メートル峰　シシャパンマに新ルートを求めて

ヒマラヤの八千メートル峰に新ルートを開拓する余地はないか。このテーマ（夢）を追い求めて過去岳人達は様々な努力をしてきた。

現在シシャパンマ峰は、主峰の標高を8,027ｍとした場合、中央峰の標高が8,008ｍとなる。このため中国隊が初登頂した北面から中央峰北東稜を登りそのまま中央峰に登頂しているケースがほとんどとなっている。初登頂した中国隊は中央峰北東稜から大雪面をトラバースして主峰に登頂している。日本隊では81年女子隊、88年ＨＡＪ隊、99年群馬隊は、この大トラバースを行い主峰に登頂した。他隊は何故トラバースして主峰に登頂しないのか。それは「雪崩」の危険を避けるためだろうと推測される。しかし、中央峰を登った岳人たちもそこが「8,000ｍ」の標高を与えられているからなのだが、ヒマラヤの標高は不動ではない。今後中央峰の標高が8,000ｍを切ることも考えられる。

シシャパンマ主峰に新ルートは考えられないのか。常々疑問に思っていた。技術的に困難な南西壁では通常ルートにはなり得ない。可能ならば通常ルートとなり得るようなレベルの新ルートをトライしたいと考えている。意欲ある岳人の参加を期待する。

記

1．時期　2003年9月10日～11月8日（60日間）

2．募集人員　10名程度

3．負担金　100万円

4．申し込み、問い合わせ　ＨＡＪ事務局

■ 寸 感 ■

8月25日、ニンチン・カンサ登山から帰国すると、今夏のパキスタン登山では死亡事故が発生していないことが分かった。秋の登山隊は、チョー・オユーを除けば、数隊であり、このまま行けば、1968年から34年間連続して発生している、日本隊の死亡事故がストップできる可能性が高い、と秘かに期待していた。ところが地域ニュースのとおり、スパンティークで死亡事故が発生してしまった。この隊の入山すら事前に知らなかったのである。海外登山情報センターの設立が急務である。

（山森）

事務局日誌（9月）

2日（月）　カラコルム連続登頂登山隊、岩崎洋隊長帰国。

6日（金）　山森理事長「ネパール・ヒマラヤ・ワークショップ」で講演（於、福岡）

9日（月）　ヒマラヤ371号発送

11日（水）　35周年記念講演会資料印刷所へ

宇都宮勤労者山の会「スパンティーク峰」遭難関係照会入る

12日（木）　35周年記念最終校正印刷所へ

18日（水）　白川義員氏「日本外国特派員協会」記者発表昼食会（山森、尾形）

28日（土）　創立35周年記念ネパール・トレッキング説明会（於、かんぼ）
創立35周年記念講演会（同上90名）
創立35周年記念祝賀会（同上102名）

30日（月）　東京集会（10名）

ヒマラヤ No.372（11月号）

平成14年10月10日印刷　14年11月1日発行
発行人　山森欣一
編集人　山森欣一
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒170-0013　東京都豊島区東池袋4－2－7
萬栄ビル501号
電話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

東京新聞の山岳書　東京新聞出版局
〒108-8010 東京都港区港南2-3-13
TEL:(03)3740-2674(直)
http://www.tokyo-np.co.jp/

最新クライミング技術
ジム、ゲレンデのフリークライミングからマルチピッチ、アルパイン、ビッグウォールまで、すべてのロッククライマー必読の書。「ひとつの技術を単なるマニュアルとしてではなく、その意味や、選択基準までを含めて詳しく解説。実践的なクライミングのポイント、心構えなども細かくアドバイス。
菊地敏之 著　1600円

山小屋の主人の炉端語
著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一人話の取って置きのお話。
工藤隆雄 著　1500円

すぐ役立つ **山の花学**
【飛騨高山の花博士】として知られる著者の、山の花見術入門書。
小野木三郎 著　1456円

すぐ役立つ **山の気象と救急法**
山の気象遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。
飯田睦治郎 桜井博幸 著　1359円

すぐ役立つ **記念日の山に登ろう**
人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はどこに。
石井光造 著　1300円

北アルプス やまびと物語
「岳人」に3年余り連載した「山人探訪・男達の賦」に加筆、登山をより楽しむための一冊。
柳原修一 著　1456円

北アルプス 山小屋物語
歴史を刻んできた66軒の山小屋をめぐる山と人の物語。
柳原修一 著　1456円

花と歴史の50山
「花と歴史の山旅」の第2弾、花の山々を訪れた珠玉のエッセー集。
田中澄江 著　1359円

改訂増補 **六十歳からの日本三百名山**
60歳から13年間で三百座を踏破したスーパーお爺さんの山行記。
田中三郎 著　1456円

新・山靴の音
還暦をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。
芳野満彦 著　1262円

中高年登山なんでも百科
「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しめるよう、中高年登山の虎の巻。
福島正明 著　1500円

登山の運動生理学百科
「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。
山本正嘉 著　2000円

山書散策
今まで数多く発刊された山書、何を読んだらよいか、そんな時の指針として――「岳人」連載時から好評。
河村正之 著　1500円

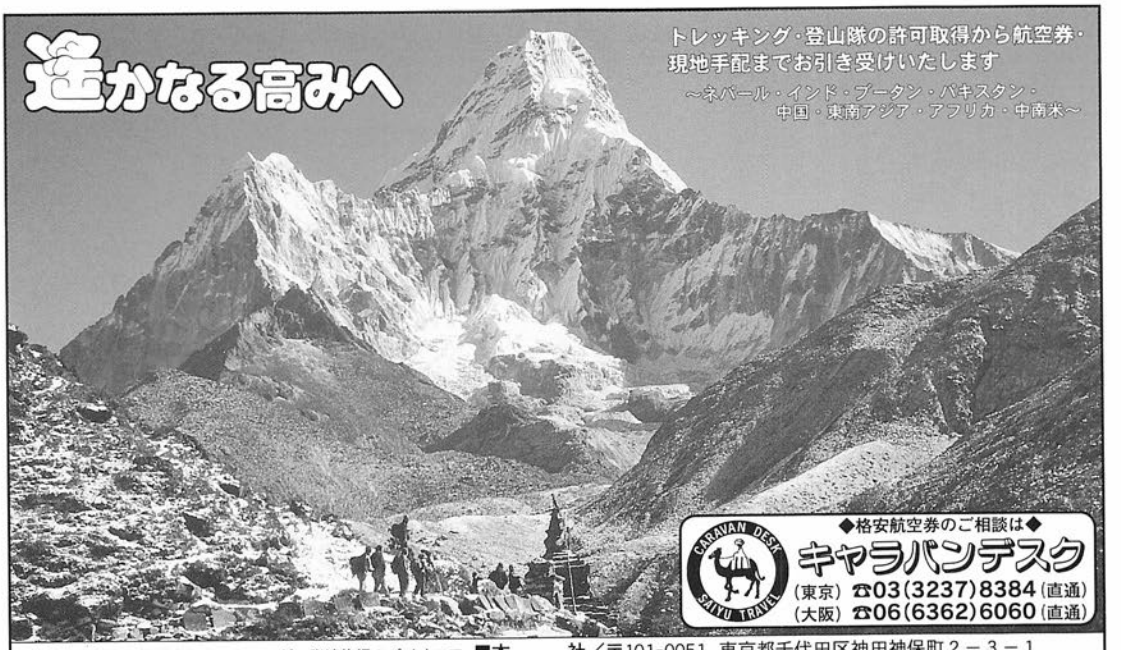
※本体価格に消費税が加算されます。

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約２０００m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ／総重量6.7kg)
- ●パルスオキシメーター
  (血中酸素飽和度測定装置／重量380ｇ／単３乾電池４本使用／携帯型)

総代理店 ： **日本メディコ株式会社**
レンタル・販売問い合わせ先 ： **株式会社 ティ・エッチ・アイ**
〒135 東京都江東区木場２-５-７ ＫＨビル７階
ＴＥＬ：03-5245-0511 ＦＡＸ：03-5245-0510
(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)



トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア
株式会社 西遊旅行
国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員
西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp)

■本　社／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町２－３－１
岩波書店アネックス５F
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

■大阪営業所／〒530-0026 大阪市北区神山町６－４ 北川ビル５F
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

お問い合わせ・お申し込みにフリーダイヤル(通話料無料)をご利用下さい。 0120－811395

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

Mt. EXPEDITION SHOP

ICI ISHII SPORTS

ICI石井スポーツ